論　　説

少子高齢社会における高齢者の党派行動

―― 明推協のプールデータ等より ――

神　江　伸　介

http : //www.jl.kagawa-u.ac.jp/～konoe/
http : //www.geocities.co.jp/Technopolis/5624/
http : //www.geocities.jp/ure888/

1. はじめに
2. 投票政党
  2.1 第Ⅰ期－63％で始まる
  2.2 第Ⅱ期－56％で始まる
  2.3 第Ⅱ期内変動－80歳から自民化の傾きが急
  2.4 全体の中での高齢者内で自民・非自民間争いが活発になる
  2.5 投票政党と解剖学－前期高齢期で加齢が止まる
3. 政党支持
  3.1 第Ⅰ期－前期・自民化→後期・非政治化
  3.2 第Ⅱ期－前期・弱い自民化→後期・自民化・非政治化
  3.3 第Ⅱ期内変動－自民化が前面に
  3.4 全体の割合－若い政党から成熟した政党へ
  3.5 解剖学－超高齢型政治意識の非政治化が消滅し自民化一色となる
4. 支持強度と性・年齢
  4.1 第Ⅰ期－女性に超高齢型政治意識
  4.2 第Ⅱ期－女性の超高齢型政治意識は消滅
  4.3 第Ⅱ期内変動－第Ⅱ期では頂点にとどまる
  4.4 全　　体
  4.5 解剖学－超高齢型政治意識の晩年期への移行

5. イデオロギー
5.1 第Ⅰ期－政党支持と類似・交わることのない「革新」
5.2 第Ⅱ期－政党支持と似るが保守化は鈍る
5.3 第Ⅱ期内変動
5.4 全　　体
5.5 解剖学－イデオロギーの累積的効果
6. 職業と政党支持
6.1 第Ⅰ期－前期まで有効
6.2 第Ⅱ期では後期でも有効
6.3 第Ⅱ期内変動
7. 高松高齢者調査の中から政党支持に与える変数の影響力について試論
7.1 変　　数
7.2 結　　果
8. 生活不満と政治不満
8.1 第Ⅰ期－生活満足最低・高 60－80%，政治満足 20－60%
8.2 第Ⅱ期－政治満足のみ不満が高い
8.3 第Ⅱ期内変動－政治満足の 80 歳からの変動
8.4 全体－生活満足化が政治満足化より多数派
8.5 投票と政治不満，高齢者の生活に満足する傾向
9. 高齢者の党派選択のパス解析
9.1 デ　ー　タ
9.2 結　　果
10. ま　と　め

1．はじめに

人々の党派的行動は政党支持[(1)]を中心として回っており，高齢者の党派的行動を考えるときももちろんそれを中心にして考える。しかし，高齢者というときこのシリーズ[(2)]でとってきた態度は，二つの段階に分かれていた。まず男女とも退職・引退しながらも高年期として何らかの形で送る段階と，超高齢期として死を迎える段階である[(3)]。分析の便宜上前期高齢期と後期高齢期とにわけて論ずるが，もちろん両者は異なっている。最初の段階の人を新老人と呼んで，従来型の老人と区別しようとする試みもそうで

あって，政治老年学も従来の概念にはまらない新しい型の集団や人が登場したら新無所属などのネーミングに慣れてきた学問としてその試みに賛成である。

そこで，本論は，1976－2001年の衆・参院選「明るい選挙推進協会」[4]のデータから少子高齢社会に直面した老人が従来の老人としての特質を持ちながらどのようにして新しい老人[5]として自己を位置づけうるのかということを，新老人の党派選択行動で見出す試みの第二作目である。

データは，参加を論じた前論文[6]と同じく，1976年の衆院選から2001年の参院選のデータまでのプールを使い，それを2つに分ける。1989年以前のデータを第Ⅰ期データと呼び，1989年より後のものを第Ⅱ期と呼ぶ[7]。高齢者の区別を，前期高齢期（65－74歳）と後期高齢期（75歳－）に位置付け，必要に応じて高齢者に入る前の年齢層も取り上げる。

1．第Ⅰ期，第Ⅱ期の期間に分けたのはこの25年ばかりの間に選挙人の行動・態度上の重要な変化があったと考えるからである。二期間の範囲の中央1983年と1996年が二つの期間を集約する年度とイメージしてもらえばいい。

2．二期間は量的に相当異なっている。第一に，第Ⅰ期に30－40代周辺に固まっていた団塊の世代が40－50代へと動いたことである。第二に，少子化傾向が第Ⅱ期の40代より下の年齢階層に現れ，高齢化傾向はそれより上の階層に現れる。明推協のサンプルでも65歳以上の高齢層をみると，第Ⅰ期の5.2%から第Ⅱ期の9.6%[8]へと2倍の伸びを示している[9]。

3．従来型の老人とは，基本的に老人の三つの試練＝退職，別れ，病気をもっており，これが，再就職の意欲の広がり，夫婦核家族化＝地域での生活環境の広がり，健康に気をつけ早い時期には寝たきりにならない，新老人にとって変わられつつある。

さて，仮説は現在のところ次のようなものが出揃っている。

政治で言い換えるなら，高齢者の党派行動の特徴は，参加行動と共通に分有するものと，党派性独自のもの，に分けられる。

(1) 共通：シーリング効果が存在する。どれが何％とはいえないが，ある変数のある値に達したら伸びにくいところに達する。

(2) 共通：高年期も含めて，成人として活動する期間＝成人政治活動期間が実に長くなった。

(3) 参加：死ぬまで作用する変数と，あるところで作用が有効でなくなる＝不活発化変数がある。ここでの党派関連変数は，超高齢期政治意識として形を変えながらも健在である。

(4) 党派：超高齢型政治意識が存在する。それは，非政治化・保守化であろう。それは，活発な政治参加（投票者）の中であらわされる超高齢型政治意識と不活発（棄権者も含めた全員）な中であらわされる超高齢型政治意識と二つあろう。保守化は依然政治にかかわるというときの選択であり，非政治化（＝満足化の政治的表現）は消極的選択をするときである。二期間においては，二つが一緒になって作用する第Ⅰ期と，非政治化を後に押しやり，自民化のみが作用する第Ⅱ期と分けられるだろう。

(5) 共通：高齢期に入るとき（ここでは進入値と呼ぶ）の値が重要であろう。高齢者が，非高齢者と違うのかどうかが決まるからだ。また，党派・満足感が問題となるときは，選挙全年齢時の交点が重要である。二つの期間で，交点がずれていることがこの仮説にとって重要である。もしそうでないなら，ただ寿命が延びるだけで何の意味もない。何がずれを発生させるか（時代，年齢等）が問題をとく鍵となるだろう。ずれを，行論図表中矢印で見た。同時に，生活満足，政治満足それぞれについて異なる源泉があり，高齢期において異なる現れ方を生じさせた。

(6) 共通：職業[10]の影響は，かなり長い間その人に影響を与える[11]ようにかわった。

(7) 共通：世代の影響が存在しており，実は，この影響を除くことが加齢とともに進む歴史的な課題である。

こういう事を明らかにするために，以下の分析においては，まず，該当変数が，１．第Ⅰ期のデータの分析，２．第Ⅱ期間は第Ⅰ期間と同じか違

うかを示す分析，３．現在は，前期高齢期と後期高齢期との間の違いは残っているか，最後に必要に応じて４．全体の割合に対する貢献度はどうか，５．老年学の一般理論と関係付けられるか，ということを述べる。加えて，データの数を確保するためにプールデータにし，そしてここ25年の発展を比較するために二期間に分けたが，年齢の影響だけではなく，世代の影響も残っているし，その選挙だけの時代の影響も残っている。老年学との関連とともに，その議論を解剖学として掲載した。

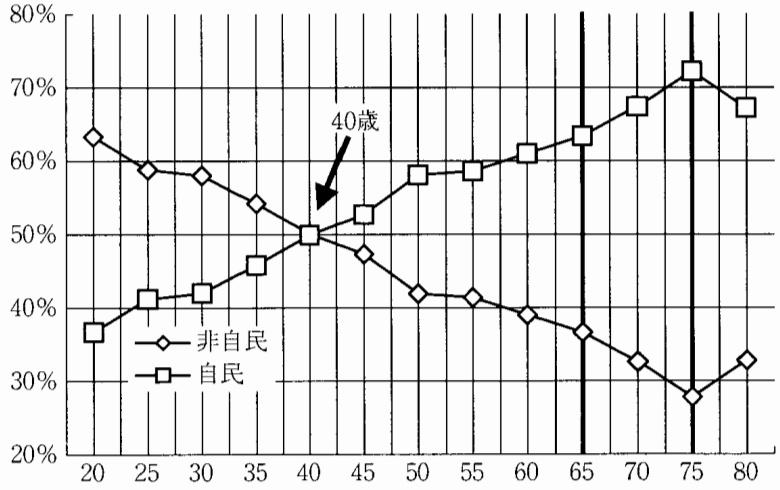
2．投票政党

変数としては，自民・非自民に再コードした。

投票しているものばかりの中での分析である。即ち，超高齢型政治意識も活発な中での現れを見ることができる。

2.1　第Ｉ期－63％で始まる

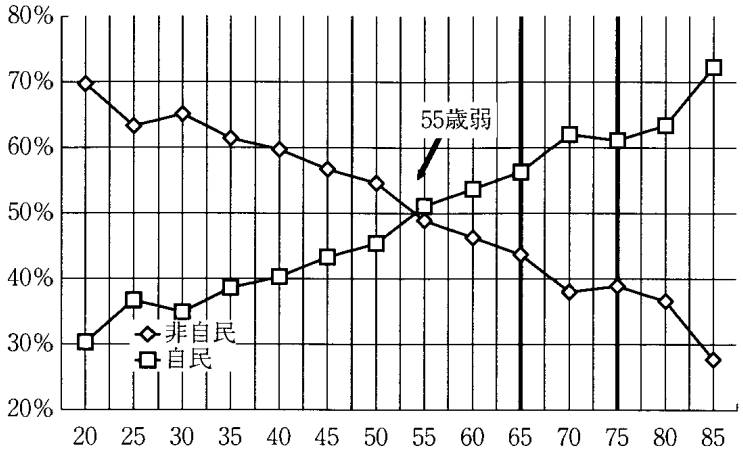
図表 2.1a　投票政党と年齢－第Ｉ期. 096



第2.1a図によると，第Ｉ期間における高齢者の自民党投票の伸びは75歳でとどまったように見える。自民・非自民の交点は40歳にある。65歳での高齢期進入時には自民投票は63％であった。75歳以上で非自民方向へ向く。

2.2 第Ⅱ期－56％で始まる

図表 2.1b 投票政党と年齢－第Ⅱ期. 094



第 2.1b 図によると，第Ⅱ期間において，高齢者は 75～80～85 と自民投票を一層強めている。交点は，55 歳弱に有り，高齢期進入時は 60％弱である。

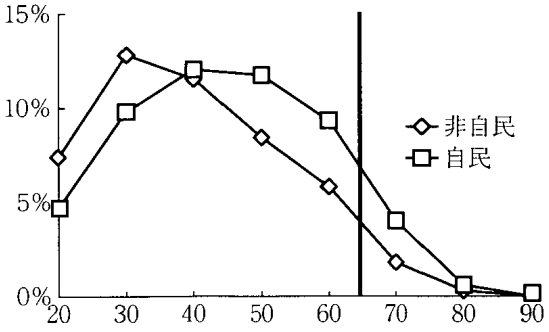
2.3 第Ⅱ期内変動－80 歳から自民化の傾きが急

自民に一層投票するという点で第Ⅱ期間においては変わっていないといえる。65～85 を一本の線でつないで見ると分かる。傾きにおいて，第Ⅰ期図表では殆ど変わりなかったのに対し，第Ⅱ期図表では約 15％の差をもち自民化の動きが急である。更に，重要なことだが前期高齢期から後期高齢期中途まで保守化が滞っている点である。80 歳から超高齢型政治意識（保守化）が見えるようだ。

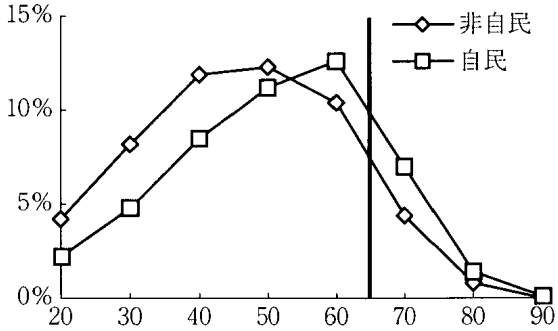
2.4 全体の中での高齢者内で自民・非自民間争いが活発になる

図表 2.4 a，b によると，第Ⅰ期の時期には 40 歳以上のグループでは安定して自民多数派であった。しかし，第Ⅱ期の時期になると，50 代まで非自民層が追い上げて来，かつ自民党－非自民間の差が縮まっている。これが，選挙結果における自民層の縷々の敗北と（公明，自由，保守などとの）連合政権を生むと同時に党内野党的な立場の小泉政権を生み維持させてい

図表 2.4a　投票政党第Ⅰ期全体％



図表 2.4b　投票政党第Ⅱ期全体％

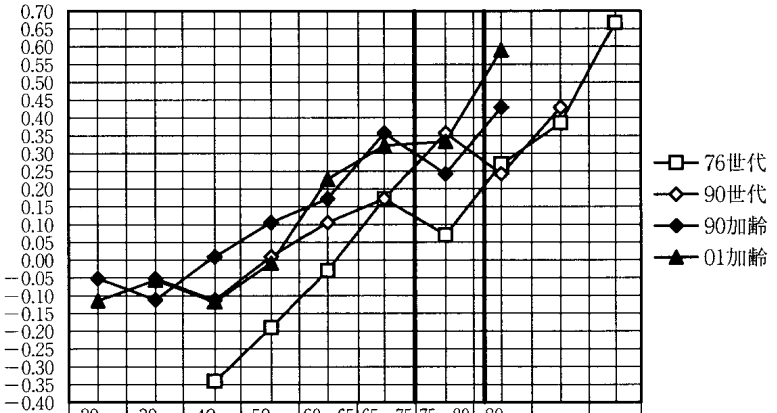


る力である。

2.5　投票政党と解剖学ー前期高齢期で加齢が止まる

正確を期すために，加齢分析・コホート分析を追加する。(12)

図表 2.5a　党派投票率各データ年齢・コホート



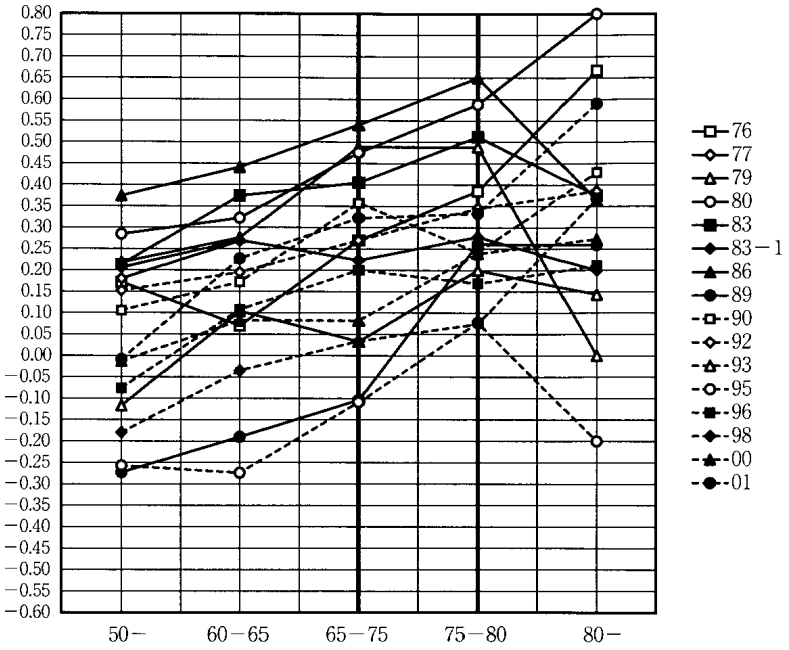
	20−	30−	40−	50−	60−65	65−75	75−80	80−		
76世代			−0.34	−0.19	−0.03	0.17	0.07	0.27	0.39	0.67
90世代		−0.05	−0.11	0.01	0.11	0.17	0.36	0.24	0.43	
90加齢	−0.05	−0.11	0.01	0.11	0.17	0.36	0.24	0.43		
01加齢	−0.11	−0.06	−0.12	−0.01	0.23	0.32	0.33	0.59		

データを年別にばらして，(13)年功効果が実は世代効果ではなかったのか，ライフサイクル全体に変化がないか，を見てみる。ライフサイクルでいうと若いとき革新的で，年をとるに従って自民化するというものである。何らかの時勢効果が入ると値は外れていく。そこで，各データとも，25年中中間点・両端点のデータをとって仮定を検証して見てみた。結果は，ライフサイクル優位であるということである。

図表2.5aによると，高齢期が常に自民化優位にあることを示している。

保守化ばかりでなく，解剖図は，もうひとつの興味ある傾向を見せている。60歳から75歳にかけて，76年のデータでは40歳から急速な保守化にあった人たちを60歳以降は急カーブを描いて保守の只中に押し込んでゆく。それに対して，90年と01年では，前期高齢期間中一時止まるか(01年）逆に非自民側に引き戻す（90年）ような動きを示すのである。

図表 2.5b　党派投票率高齢者データ



では，これらの現象は，提示したデータに限ったことなのだろうか？図表2.5bでは，生年齢をとっていないデータに気をつけながら全データを示したものである。第Ⅰ期データ群では4データ中3データがこれにはまり（直線的保守化），第Ⅱ期データ群の中では6データ中4データがこれに（一時休止型保守化）嵌っている。(14)

なぜこういう現象が起こるのだろう。ひとつは定年退職である。第Ⅰ期データ群では55歳定年ということで，50歳からデータを見たのだがどうもはっきりしない。第Ⅱ期データ群では，職場の拘束から自由になることに関係が有りそうである。同時に，寿命の長期化と健康化と関係が有りそうである。

何にしても，投票者のデータである。活発な選挙人に取り囲まれて，新

老人たちは保守化開始を遅らせそのことにより，成人選挙人として参加できる期間がぐっと長くなったということは言えそうである。

3．政党支持

3.1　第Ⅰ期―前期・自民化→後期・非政治化

(1)　まず，第Ⅰ期データでは，自民計（グラフでは強＋弱自民，本文中の値は「**図表3　年齢層別政党支持率**」による）の出発点の％値は23％で，65歳の高年期進入時には57％であった。弱い支持層は各々21％，37％である。強度で言って，自民は，２％の殆ど変わらない弱い支持層から出発し，20％の違いを持つ政党に成長したといえる。勢力で言って，非自民に３％の遅れを取る少数派から24％の差をつけた多数派となって成熟したといえる。高齢期では，75歳代まで５ポイント伸び続けそこで自民化は止まる。棄権者も見る政党支持でも投票政党の第Ⅰ期はあまり変わらない。

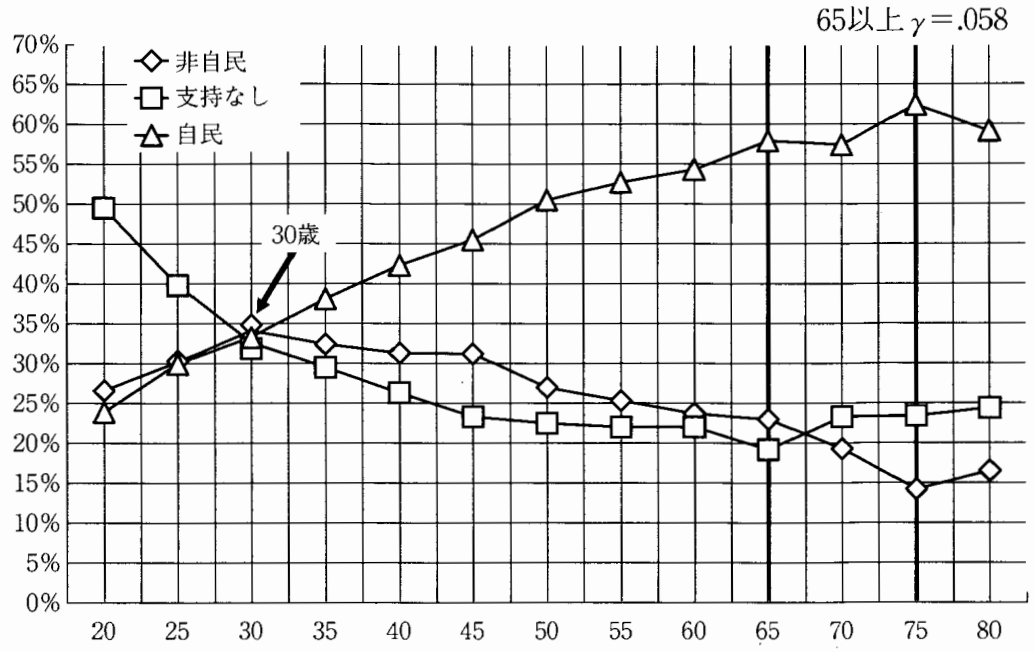
(2)　次に非自民支持層に移ろう。第Ⅰ期データでは，非自民の計（強＋弱非自民党）の出発点の％値は26％で，65歳の引退進入時には23％であまり変わらない。弱い支持層は各々22％，15％である。強度で言って，４％の殆ど変わらない弱い支持層から出発し，８％の違いを持つ自民と較べればあまり非自民支持は強化されない。勢力で言って，自民に３％の優位を取る多数派から24％の差をつけられたため少数派とおとしめられる。高齢期でも17％まで下がり続け，（たぶん保守化の）超高齢型政治意識が働いているといえる。

(3)　支持なし層は，第Ⅰ期データでは，支持なしの出発点の％値は50％で，65歳の引退進入時には20％と30％激減した。高齢期では逆に，25％まで増え続ける。（支持なしのほうはたぶん非政治化の）超高齢型政治意識が働いているといえる。

3.2　第Ⅱ期―前期・弱い自民化→後期・自民化・非政治化

(1)　第Ⅱ期データでは，自民の計（強＋弱自民）の出発点の％値は15％

図表 3.1a　政党支持と年齢ー第Ⅰ期



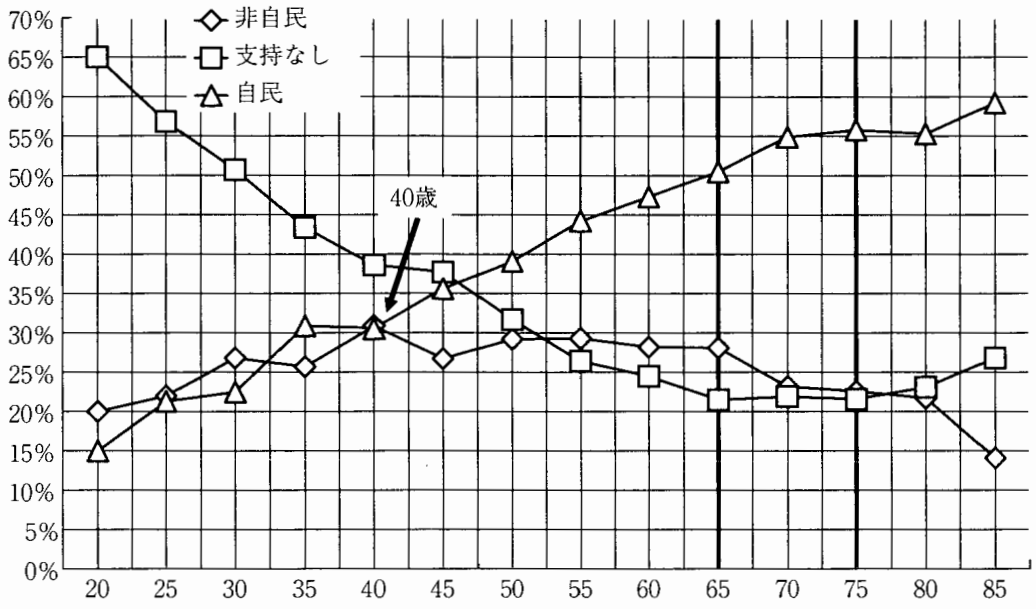
図表 3　年齢層別政党支持率（強・弱毎に）

第Ⅰ期						第Ⅱ期					
	強＋弱非自民	弱非自民	支持無し	弱自民	強＋弱自民		強＋弱非自民	弱非自民	支持無し	弱自民	強＋弱自民
20	26%	22%	50%	21%	23%	20	20%	16%	65%	13%	15%
25	30%	23%	41%	24%	29%	25	22%	17%	57%	19%	21%
30	34%	25%	33%	27%	33%	30	27%	19%	51%	20%	23%
35	32%	22%	30%	30%	38%	35	25%	18%	44%	25%	31%
40	31%	23%	27%	32%	42%	40	31%	22%	39%	24%	31%
45	31%	22%	24%	32%	45%	45	27%	19%	38%	28%	35%
50	27%	19%	23%	37%	50%	50	29%	20%	32%	28%	39%
55	25%	18%	23%	36%	52%	55	29%	19%	27%	32%	44%
60	23%	16%	23%	36%	54%	60	28%	17%	25%	32%	47%
65	23%	15%	20%	37%	57%	65	28%	17%	22%	33%	51%
70	19%	14%	24%	38%	57%	70	23%	13%	22%	34%	55%
75	14%	10%	24%	39%	62%	75	22%	11%	22%	34%	56%
80	17%	8％	25%	41%	59%	80	21%	14%	24%	36%	55%
						85	12%	7％	28%	41%	60%

で，65歳の引退進入時には51%であった。弱い支持層は各々13%，33%である。強度で言って，2%の殆ど変わらない弱い支持層から出発し，18%の違いを持つ政党に成長したといえる。勢力で言って，非自民に5%の遅れを取る少数派から22%の差をつけた多数派となり成熟したといえ

図表 3.1b　政党支持と年齢－第Ⅱ期

65以上 $\gamma = .079$



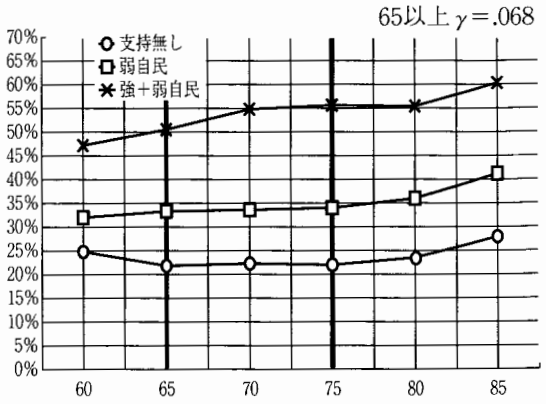
る。高齢期では，85歳代まで10ポイント伸び続ける。超高齢型政治意識が働き続け規模も倍加する。自民非自民の交点は10年後へずれて40歳であった。

(2)　次に非自民支持層に移ろう。第Ⅱ期データでは，非自民の計（強＋弱非自民党）の出発点の%値は20%で，65歳の引退進入時には28%で第Ⅰ期データより大きい。弱い支持層は各々16%，17%である。強度で言って，4%の殆ど変わらない弱い支持層から出発し，第Ⅰ期と較べて，11%の違いを持つかなり非自民支持は強化している。勢力で言って，自民に4%の優位を取る多数派から23%の差をつけられる少数派になるのは同じ。高齢期でも12%まで16ポイントも下がり続け，第Ⅰ期より10ポイントも強く保守化の超高齢型政治意識が働いている。

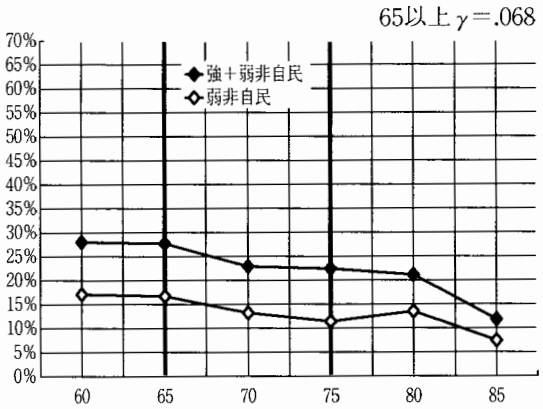
(3)　支持なし層は，第Ⅱ期データでは，支持なしの出発点の%値は65%で，65歳の引退進入時には22%と43ポイント激減した。第Ⅰ期より更に13ポイント高い。高齢期では逆に，28%まで増え続ける。が，非自民化のほうが強いのが特徴である。（支持なしのほうはたぶん非政治化の）超高齢型政治意識が働いているといえる。

3.3　第Ⅱ期内変動－自民化が前面に

図表 3.3a　政党支持と年齢－第Ⅱ期



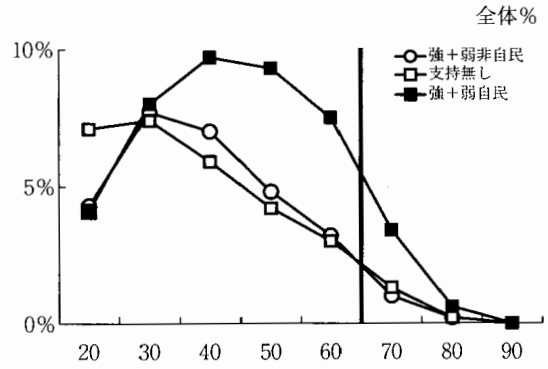
図表 3.3b　政党支持と年齢－第Ⅱ期



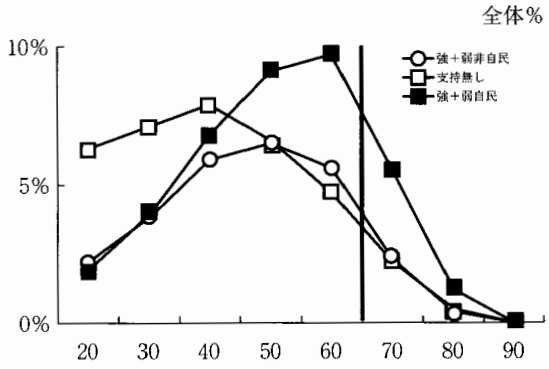
第Ⅱ期データでは，政党支持の場合，保守化が全面的に超高年期で現れるとするなら，保守化は65歳から始まるが中途で止まり，80歳から変化がそろうようになる。保守化では，65歳の進入口で緩やかな形で進み，80歳の50%で傾きが自民方向へ急峻となる。ほとんど非自民側からの移動であって無党派側の動きはほとんどない。80歳になると，保守化（第Ⅰ期では，65から）の超高齢期政治意識が一層貢献し，急速に自民支持が増えていき，他方無党派化＝非政治化も貢献することになった。

3.4　全体の割合－若い政党から成熟した政党へ

図表 2.2.4a　政党支持と強度と年齢－第Ⅰ期



図表 2.2.4b　政党支持と強度と年齢－第Ⅱ期



第Ⅰ期データは，自民支持において左肩上がりで，高齢者の方もそこそこ多数派であるが，むしろ若々しい様子が見て取れる。無党派層は，若いころの10年ぐらいが無党派を続ける程度で，すぐに党派層に移る。若年

時に非自民であり高年期時に自民である。高年期には，非政治化と保守化が同時に始まるとともに，あまり数がいない。

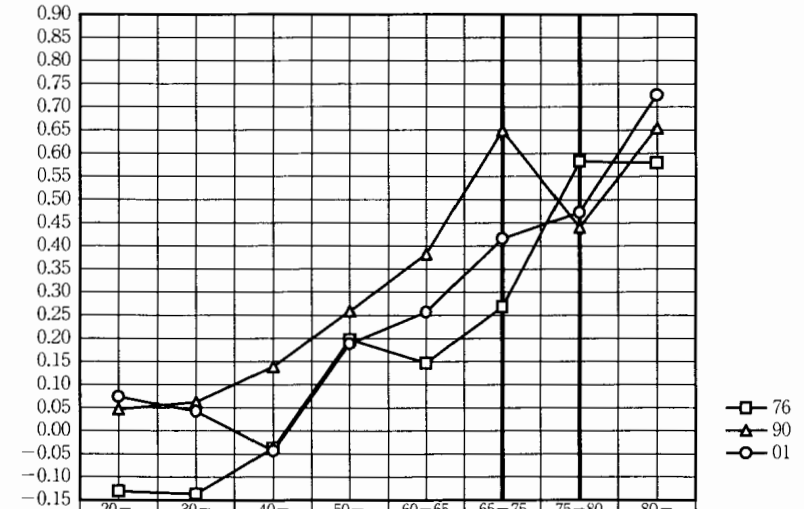
第Ⅱ期データでは，自民支持層が右によると同時に，無党派・非自民層の勢力もそこそこ保っている。80歳前後と遅くなってから超高年期政治意識を出してくるようになる。

即ち，党派対立の闘争場裏＝アリーナはぐっと右の中年方向へ移り，前期高齢期は選挙ゲームの真っ只中であるといえる。

3.5　解剖学ー超高齢型政治意識の非政治化が消滅し自民化一色となる

ここでも，図表2.5aと同じ形で，期間の両端と，中間点をとって示した。値は平均点であるが，これで見ることによっていずれかの層の数が少ないときは，全体の数に隠されてしまって全体の優位な傾向が前面に出せることがあり，％と一味違った魅力がある。具体的に言えば，三調査年度の後期高齢者を比較していただきたい。76，90年は後期高齢者は75歳で伸びなやんでいた。ところが，01年度では，スムーズな右肩上がりである。即ち，非政治化が優位する第Ⅰ期後期高齢者と，自民化が優位する第Ⅱ期後期高齢者の違いを表している。

図表3.5a　政党支持各年次データ



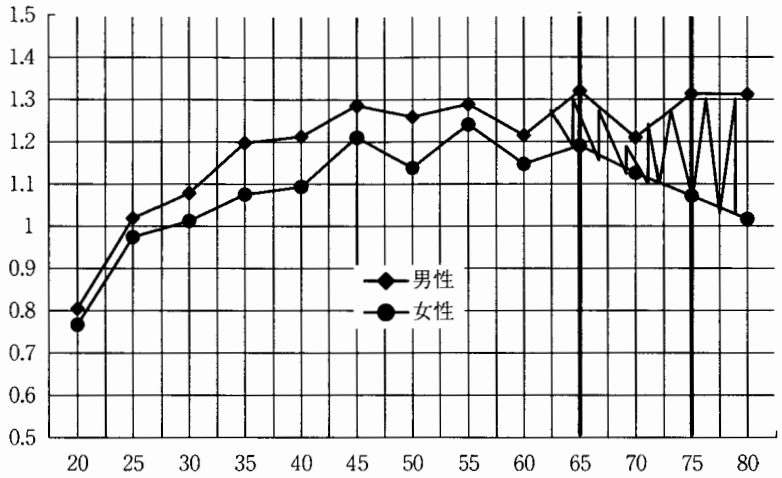
	20−	30−	40−	50−	60−65	65−75	75−80	80−
76	−0.13	−0.14	−0.04	0.20	0.15	0.27	0.58	0.58
90	0.05	0.06	0.14	0.26	0.38	0.65	0.44	0.65
01	0.07	0.04	−0.04	0.19	0.26	0.42	0.47	0.73

4．支持強度と性・年齢

支持強度は，支持なし＝0，弱い＝1，強い＝2である。いずれも，調査現在のデータである。(15)

4.1　第Ⅰ期ー女性に超高齢型政治意識

図表 4.1　支持強度と性別　支持無第Ⅰ期



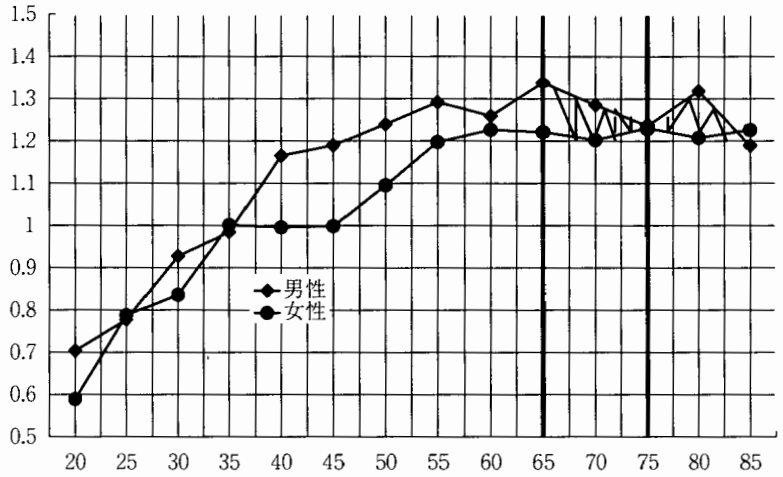
図は，支持強度につき選挙人全体ではあまり違いが現れなかったので，性別に分けてみたものである。

図表4.1とともに，従来の年齢と強度の相関の図と，下の横軸に，二つのファイルの最初の年度を基準とし，その年に始めて有権者となる，世代尺度を入れてみた。(16) くわしくは4.5で触れるとして，ここでは，65歳以上の女性選挙人が，社会化の遅れで支持強度の弱まりを生むにしてはあまりにも弱まり方が下向きの直線的である点に注目する。選挙権を持ってからの年齢をふるにしたがって支持強度は上がるし，「抵抗現象」も絡んでなおいっそう強いだろうが，事実は下がっている。女性平均1.1から1.2という最高値にとどまっているところを最瀕値と考えたほうがいい。したがって，第Ⅰ期データでは，女性に非政治化の超高齢型政治意識（本来強まるべきところを下がっており，実は歴史的遺物でもある，後述）が働い

ているといえるのではないか。男性のシーリング効果は1.3を上回るところにあるが，こちらは晩年まで落ちない。

4.2 第Ⅱ期ー女性の超高齢型政治意識は消滅

図表4.2 支持強度と性別・支持無第Ⅱ期



図表4.2では，男性に1.2から1.3の頂点を見せ，女性に1.2強の頂点を見せ，女性の「超高齢型政治意識」は無縁となった。

最も若いグループでは支持強度差がほとんどなくなっている。

4.3 第Ⅱ期内変動ー第Ⅱ期では頂点にとどまる

第Ⅰ期は前期高齢期から急降下である。第Ⅱ期は何の変化も見せず頂点にとどまっている（シーリング効果）。

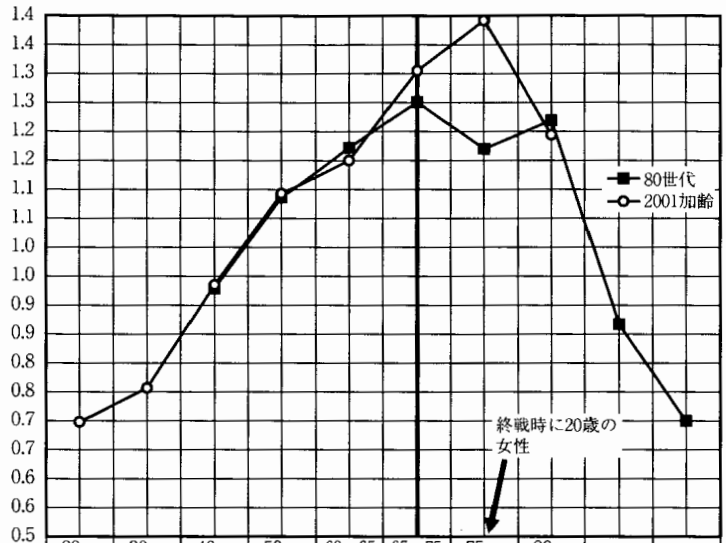
4.4 全　　体

該当せず。

4.5 解剖学ー超高齢型政治意識の晩年期への移行

ここで，更に，加齢効果と世代効果を考えて，女性高齢者にとって支持強度は加齢効果の関数になってきたということを示しておきたい。すなわ

図表 4.5　女性支持強度平均値の年別グラフ・コホート（2001 年）



	20−	30−	40−	50−	60−65	65−75	75−	80−		
80世代			0.93	1.09	1.17	1.25	1.17	1.22	0.867	0.7
2001加齢	0.70	0.76	0.94	1.09	1.15	1.31	1.39	1.19		

ち，選挙権が与えられていないときは，政党支持というのは遠い存在であって，選挙権が与えられると，中年までの女性は慣れるが，それより年を取っている女性は慣れない。それは，図表 4.5 に出ている。つまり，強度が弱いままに晩年にいたった。それから 25 年たった 75 歳の 80 年女性は，やはり 75 歳で落とし始めるのだが，それは人生の終わり近くになってからである。

つまり，大部分の年齢の効果は超高齢型政治意識（非政治化）を後に押しやり，結果として男性と肩を並べるという効果を持っていることが分かる。

5．イデオロギー

質問文は，「Q　よく保守的とか革新的とか言う言葉が使われていますが，あなた御自身はこの中のどれに当たるとおもいますか。

2．保守的
1．やや保守的
0．中間
−1．やや革新的
−2．革新的

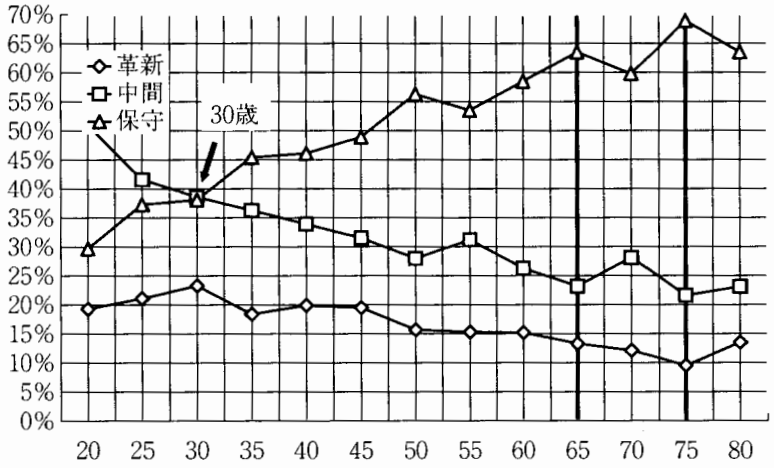
6．わからない（欠損値にした）」

である。

ここでは，保革イデオロギーの変数それ自体を分析することが狙いである。

5.1　第Ⅰ期ー政党支持と類似・交わることのない「革新」

図表 5.1　イデオロギーと年齢ー第Ⅰ期



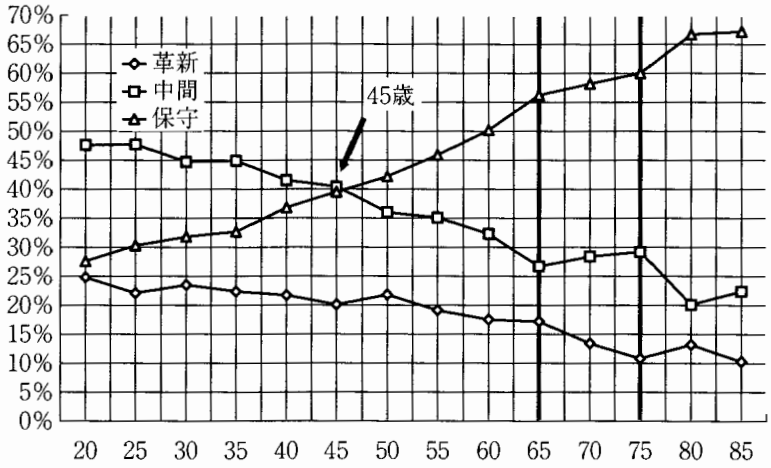
(1)　まず，第Ⅰ期データでは，革新の出発点の%値は19%で，65歳の引退進入時には13%であった。高齢期では，75歳代まで3ポイント下げ続け80歳で4%あがる。通しで見ると13%から14%と殆ど変わらない。交点は30歳にあり，投票政党では40歳で非自民と自民が入れ替わったが，この場合は「中間」と「自民」である。政党支持では，交点の年齢は一致するが革新派が，非自民派より10ポイント程度低い。図表は，基本的に政党支持に近い。

「中間」の出発点は51%，引退進入時で23%，高齢期には一時28%をとったことがあるが23%前後が多数派である。

5.2　第Ⅱ期ー政党支持と似るが保守化は鈍る

第Ⅱ期データでは，図表5.2に示してあるが，やはり全年齢層にわたってみてみよう。まず，保守は28%から出発し，一直線に伸び始め，85歳の67%で頂点を見る。保守と中間派との交点は45歳である。他方，革新

図表 5.2　イデオロギーと年齢ー第Ⅱ期



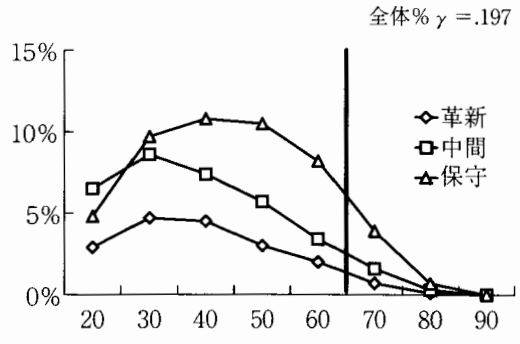
系は25%で出発し50歳まで上・下の動きが殆どない。50歳を過ぎると革新は下がり始め10%で最低となり，50−85歳の差は10%の違いである。保守は中間派を食べて太ってきたとはここでもいえる。中間派は当初48%で出発し，80歳の20%強とほぼ一直線に30%は下落する。80歳から保守に喰われることはなくなった。大体，80歳で保守化は鈍化したといっていい。非政治化という政党支持ではなくなっていた超高齢型政治意識はまだ健在である。

5.3　第Ⅱ期内変動

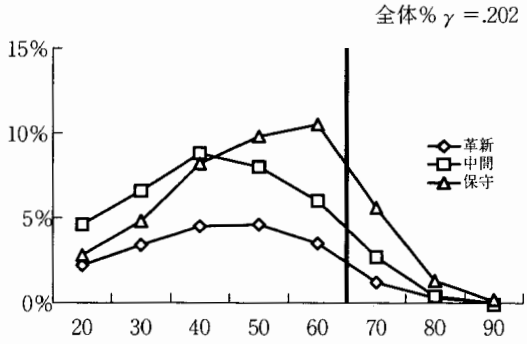
政党支持と類似するため省略。

5.4　全　　体

図表 5.4a　イデオロギーと年齢ー第Ⅰ期



図表 5.4b　イデオロギーと年齢ー第Ⅰ期



基本的には,政党支持に似ているが,第Ⅱ期につき二点付言しておこう。第一に，保守の最大のグループがもう高齢期にさしかかっているということ，第二に，中間グループがはっきりと存在しているということである。このことが，現在の段階で何を意味しているかわからないが，政治的に大きな流動化の余地を残しているといえよう。

5.5 解剖学ーイデオロギーの累積的効果

それでは,こちらもデータの年別分解をした解剖図で細かく見てみよう。

(1) 保守性

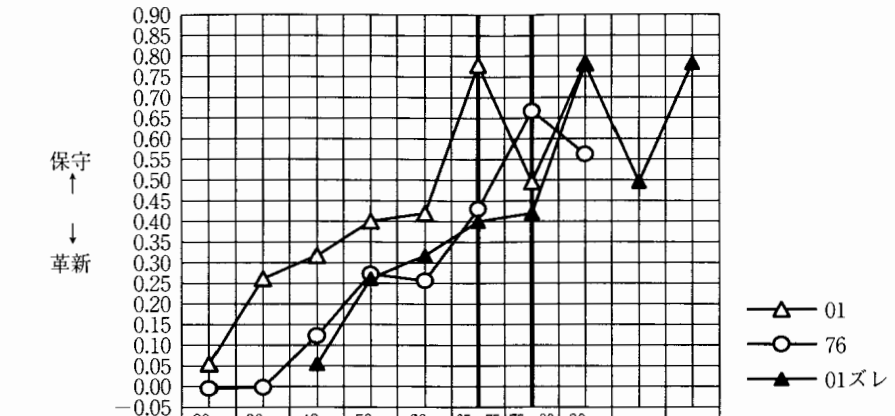
一般に，老人の人格上の特徴として，老年心理学では「保守的」であるといわれる。

例えば,「①自己中心性，②内向性，③保守性，⑥猜疑，邪推しやすさ，強い嫉妬心，⑤柔軟性・融通性の欠如，強い固執性，⑥適応力の低下，⑦不機嫌，愚痴っぽさ，⑧出しゃばり，⑨心気的，⑲依存的，⑭抑うつ傾向」が見られるとし「保守性」が挙げられている。しかし,「新しいことを記憶したり学習する」ことを嫌がり「使い慣れた方法に頼る傾向」という程度の意味で保守性である[17]。この程度の保守性だったら誰にでもあろう。

他方,「慎重，用心深い」という意味で保守性に近い意味で扱おうとする。1970年代頃の実験室研究から示されてきたのだが,「老人にとって不快な実験室事態では，老人に自信を失わせたり，失敗をするのではないかという恐れを抱かせたりしやすい。そのために老人は正しい答えを出すことにこだわるために慎重になってしまいやすい」と批判される。むしろ「老人の自我を保持する適応的なメカニズム」の現れと見てよいといわれる[18]。

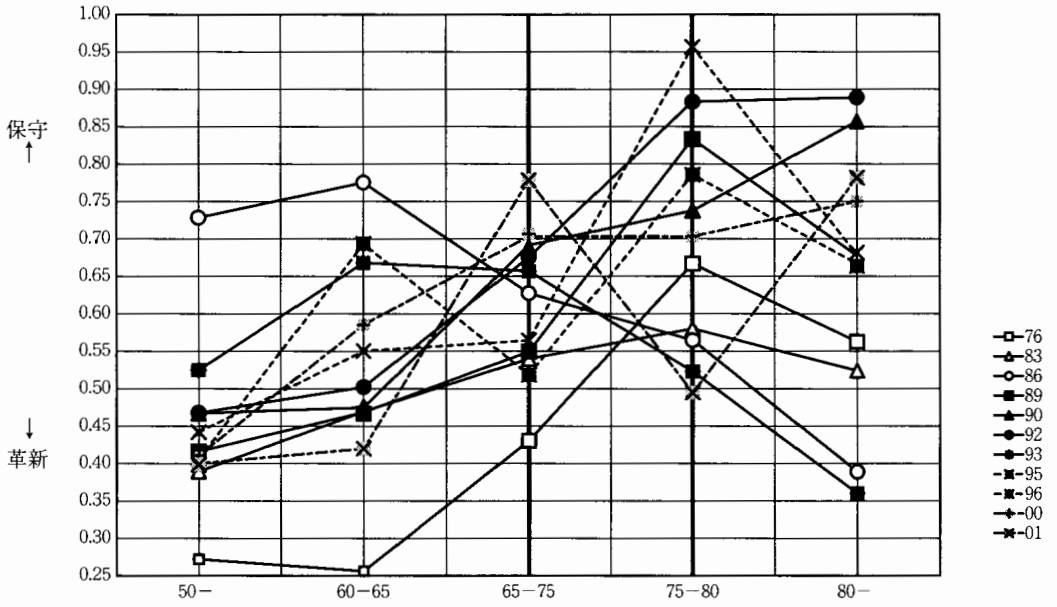
選挙の調査だから対象者も保守性をもっと政治的に捉えているのだが，ここでも高齢者の保守性はその存在を認めることができるし，図表5.4aで見るように，76年から25年経過後の01年にはその平均値を保守のほうへ大きく上げてきている。この場合の値は,「保守」「やや保守」「中間」「やや革新」「革新」の５つの値の平均値である。これまでの，パーセン

図表 5.4a　イデオロギー各年次データ・コホート



	20−	30−	40−	50−	60−	65−75	75−80	80−		
01	0.05	0.26	0.32	0.40	0.42	0.78	0.49	0.78		
76	−0.00	−0.00	0.12	0.27	0.26	0.43	0.67	0.56		
01ズレ			0.05	0.26	0.32	0.40	0.42	0.78	0.49	0.78

図表 5.4b　イデオロギー各年次データ



ト値とは違う。さて，加齢図を，世代図にそのまま重ねるとドンぴしゃりと一致する。ということは，平均点では保守化は一定の年齢階層に特定の割合で存在するのではなくて，一定のコホートに特定の割合で保守化が得られたとするなら，そこから時間の経過とともに更に保守化を勝ち取り得るというコホート効果が見られる（パーセントでは違う）のである。政党支持では見られない現象である[19]。保守化が時代とともにすすむということは，今後解明してゆく課題である。

(2) 元気な高齢者とそうでない高齢者

次に，イデオロギーのデータでは，図表5.4aで見るように，超高齢期に必ず保守化はダウンしている。全てのデータでいえるか図表5.4bに更に解剖を拡大してみた。そうすると，01年のみを例外として，75歳以降に，前期高齢期より高齢者が保守化のペースを一定かないし落としている。01年も前期高齢期と一緒に見れば「一定」の群に入るだろう。こういう現象は投票政党では見られなかったことである。問題をとく鍵は全員に聞いた保革意識と投票者のみに聞いた投票政党のデータの違いにありそうである。いわば，投票参加を続ける元気な高齢者とそうでない高齢者の違いがあり，その意味では超高年期の高齢者は二極分解しているとみられるだろう。何が超高年期の高齢者を二極分解させたかについては明推協のデータでは限界がある。筆者が行った高松高齢者調査にそのヒントを得ることができる。7で再論する。

6．職業と政党支持

本稿の関心も，職業がデモグラフィックな要因の中でもっとも大きな影響力を持っているとみる[20]。その前提にしたがって，明推協データの中でその簡略化した指標を使ってその前提がプールデータでも存在するという証明と，超高年期政治意識が第Ⅰ期では前期高齢期からすでに現れているということと，「背後にある」保革イデオロギーが，政党支持の背後に常にあり，非高年期には職業と並行して影響を与え，高年期には職業を上回ってくるようになる筈である[21]。

図表2.3.1　政党支持に対する職業と保革意識の回帰

	第Ⅰ期65歳以下	前期高齢期	後期高齢期	第Ⅱ期65歳以下	前期高齢期	後期高齢期
R2	0.32	0.39	0.23	0.23	0.30	0.26
（定数）	−0.05	0.20	0.22	0.03	0.15	0.27
保革意識	**0.52	**0.59	**0.47	**0.44	**0.52	**0.49
自前意識**	**0.15	**0.16	−	**0.13	**0.10	**0.13

* 有意性<0.00以下である。
**非高齢者については，主婦・無職は除外してある。高齢者は投入してある。値はベータである。

6.1　第Ⅰ期ー前期まで有効

第Ⅰ期データでは，非高齢者では，決定係数が0.32と，保革意識も自前意識も貢献をしている。更に，前期高齢者ではいずれも優意性があり回帰係数も殆ど非高齢者と同じである。しかし，後期高齢期では，決定係数は下がって，ベータも下がっているが，自前意識は優意性が消えている。

6.2　第Ⅱ期では後期でも有効

第Ⅱ期データでは，若干決定係数を下げているものの，保革意識（約0.5）・自前意識（約0.1強）とも有意味な貢献をしており，三者の関係の強さを見せた。ここでは，高齢者か否かは関係ないといいうるに近くなっている。

6.3　第Ⅱ期内変動

ほぼ違いはない。

そこで，第Ⅰ期も第Ⅱ期も，変わりなく保革意識が影響を与え続けた説明と，第Ⅱ期では保革意識と職業の二つが影響を与えた説明として，次の二点を考える。

第一に，超高齢型政治意識は，保革意識に独特な形で働き続けることである。寿命いっぱい人間が生き続けるなら，およそ100%になるまで保守化は進むであろう。

第二に，非自前に，サンプルがなくなることを心配して，年金生活者と主婦層を一括して投入したことである。この問題は，多くの前職を持つものと一緒に投入したので，年金生活に入るとすぐに前職のことを忘れるのか，前職の影響は退職後何年まであるのか，しばらくは夫婦の暮らしを続けるか，その間は自前的で，超高齢期になって子との生活に入ると依存的になるのか，細部の議論はできていない。調査データの問題である。

7．高松高齢者調査の中から政党支持に与える変数の影響力について試論

7.1 変　　数

(1) 政党支持－自・非自・強度付
　－2.00　強非自民
　－1.00　非自民
　　.00　政党支持なし
　　1.00　自民
　　2.00　強自民
(2) 保革意識
　　1.00　革新
　　2.00　やや革新
　　3.00　中間
　　4.00　やや保守
　　5.00　保守
(3) 自前
　　1.00　非自前
　　2.00　自前
(4) 世帯状況
　－1.00　本人と子（含孫）
　　.00　夫婦二人
　　1.00　単身
(5) 家計
　－2.00　非常に心配
　－1.00　心配
　　1.00　まあまあ豊か
　　2.00　豊か

私は，2003年に高松の65歳以上の高齢者を対象にして面接調査を実施した。調査日は03年9月上旬，サンプルは300名，回収は234名，方法は老人大学での約150名の半分面接調査[22]と，市立のデイサービスセンターでの依頼調査（150名）で構成する[23]。

従属変数は,(1)政党支持で,明推協と同じく政党支持強度を入れてある。

独立変数は，(2)保革意識，(3)自前意識，(4)世帯状況，(5)家計が投入されている。(2)(4)は通常のものだが，在職時の主な職業を聞いた(3)，核家族化を反映する(4)，ほぼ年金のみの収入になってしまう(5)，は独自の答えを期待できた。

全年齢層を対象にすると余り優意な関係が出ないので，晩年型同居として注目される[24]前期・後期高齢期に分けて分析した。そうすると面白い関係がでてきた。

九六

7.2 結　　果

図表 7.2　高松調査

		65－75 歳	75 歳以上
	R2 乗	0.27	0.44
	定数	.22	1.37
保革意識		**0.52	**0.46
世帯状況		－	**0.46
家　　計		－	**0.44

**0.00 以下で有意。

まず，前期後期高齢期とも，職業の要因はなんの働きもしないし，それは（ほとんどの人が）引退後割と早いころに生じてくるということである（そこで投入変数から削除）[25]。前期高齢期では，その代わりに有効な説明要因となるのが保革意識である。まだ決定係数として 0.27 で大きいけれども，後期高齢者ほどは大きくない。

75 歳以上になると，少ない要因の中で決定係数も高まり（いわばコンボイ[26]の一番内側），保革意識もしっかり残存するし，世帯状況にも影響を受け，そして家計もより大きな要因として現れてくる。自分の政治意識が周りの環境に影響される超高齢型政治意識が現れているようだ。政党支持は，自己のイデオロギーに基づくものの，生活は子などに頼らざるを得なくなり，家計も益々高齢となって不安となり，自分のコントロールから離れてゆく中での政治意識の現れ方である。

8．生活不満と政治不満

満足変数に入る前に，両変数の政治変数との類似性と異同について触れておこう。

三宅は，自民への投票が国政信頼（政治不信とやや近い）と関係があり，それよりやや落ちるが生活満足度でも同様，と報告している[27]。また，明推協のデータでも，政党支持と関係付けると非高齢者は第Ⅰ期，第Ⅱ期ともかなり関係がある。高齢者中で前期は第Ⅰ期，第Ⅱ期とも非高齢者より強い関係があり，第Ⅰ期でいえば政治満足－生活満足の順となり，第Ⅱ期で

は生活満足のみ有意な関係は消えている。後期高齢者はいずれのデータからも政治満足，生活満足とも影響を下げるか有意な関係さえ消えている。

とはいえ，両者は政治変数としては政党支持とはかなり遠い。政治満足は，不満が一方の政党に行けば他方の政党が不満を救済してくれる，という形で，デモクラシーの中で当然にも処理されるノーマルな解消の道がある。他方で，両政党不信の場合，非政党的な形で政治にかかわり続ける，非政治的領域で大いに活躍の場を見つける，など，回帰係数を弱める要因も多い。生活満足はもっとかかわりが遠く，文字通り生活に関連した多くの要因が支持を弱める。それでも，関係はあるわけで，それがなぜ関係が有り，なぜ関係がなくなるのかを，示していくことが，老年学と政治学との交流点を見出すことにもなるのである。

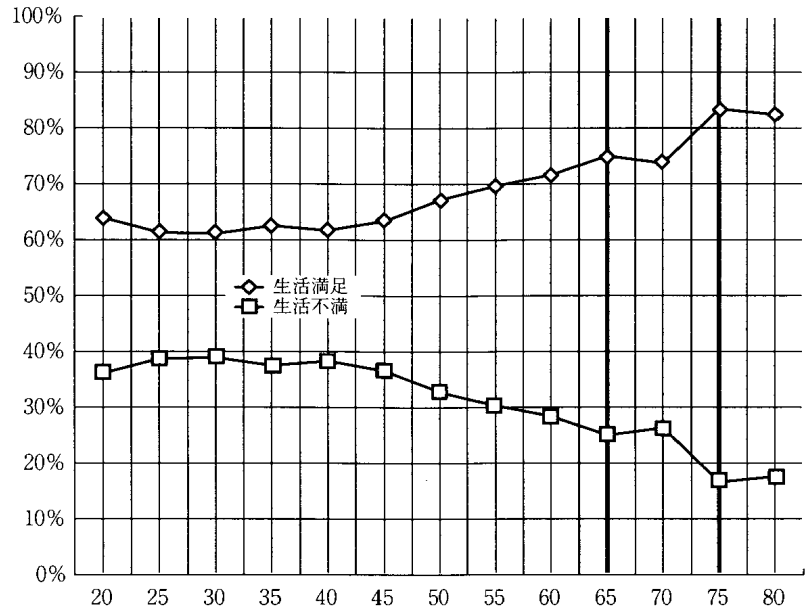
8.1　第Ⅰ期－生活満足最低・高 60-80%，政治満足 20-60%

生活満足と年齢との関係を示す図のうち第Ⅰ期データを示している図を見てみよう。図表 8.1a である。政治満足は図表 8.1b である。生活満足・政治満足ともに 65 歳以上は 10%弱の変化である。生活満足は満足・不満足の交点がなく，一方政治満足は,75 歳以前に見られる。生活・政治満足の最低・高値は，おのおの 61・83%，18・62%である。高齢期進入値は生活・政治満足おのおの 75，42%である。

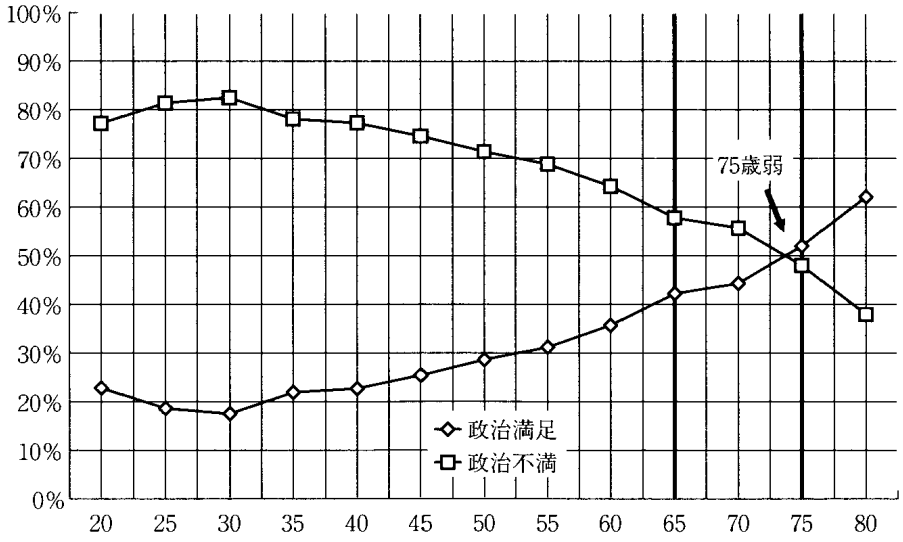
8.2　第Ⅱ期－政治満足のみ不満が高い

図表 8.1c の第Ⅱ期データではやはり 65 以上は 10%弱の変化である。その意味では，第Ⅰ期と第Ⅱ期では 70 から殆ど同じだといえるが，第Ⅰ期では 75 歳で止まっている。そして一生を終える。第Ⅱ期では 80 歳でも満足・不満感の大きくなるのは止まらない。交点は 80 歳までは見られない。生活・政治満足の最低・高値は，おのおの 64・81%，14・61%である。高齢期進入値は生活・政治満足おのおの 73・31%である。政治満足のみ 5 から 10%不満が高くなっている。

図表 8.1a　生活満足と年齢ー第Ｉ期



図表 8.1b　政治満足と年齢ー第Ｉ期

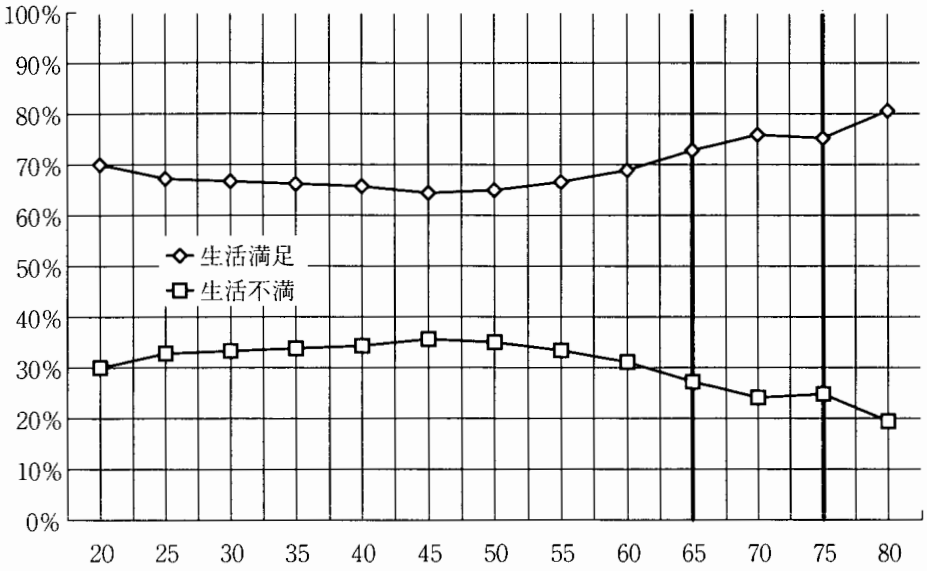


8.3　第Ⅱ期内変動ー政治満足の 80 歳からの変動

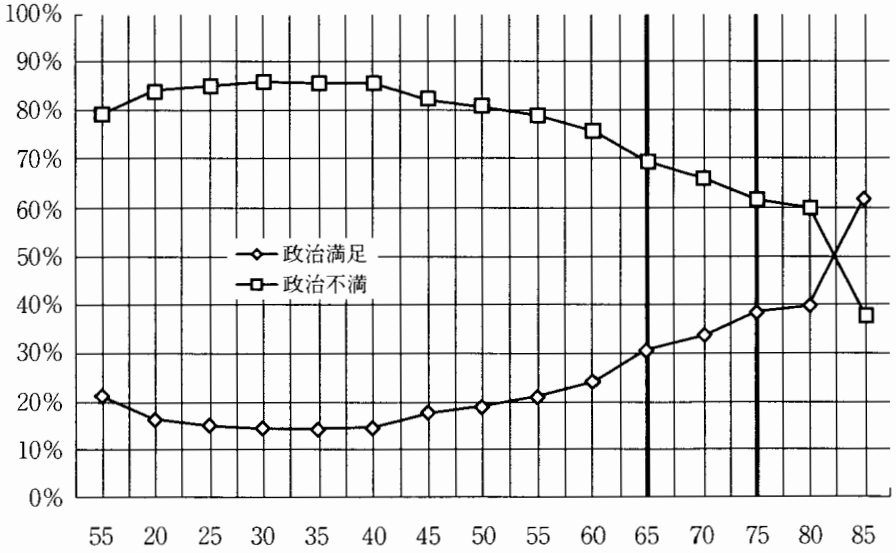
前半は若干滞っているようだが 70 歳以降は着実に満足化を示す。

第Ⅱ期データでは 65 以上は 10%弱の変化である。しかし 5 歳きざみのデータで見ると一挙に 80 歳から 85 歳において政治不満・満足が入れ替わるほど実に激しく，値の変化も 10%強である。80 を超えて超高齢型政治意識＝満足化が現れたのである。政治不満では，65 歳から 80 歳までいわ

図表 8.1c　生活満足と年齢ー第Ⅱ期



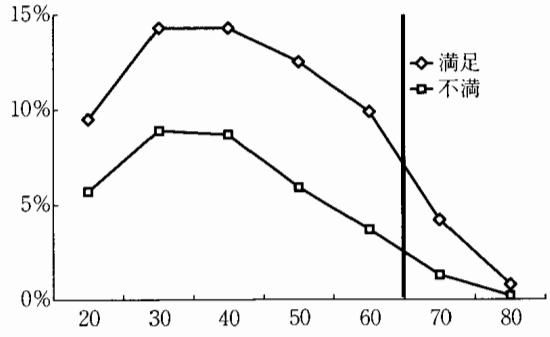
図表 8.1d　政治満足と年齢ー第Ⅱ期



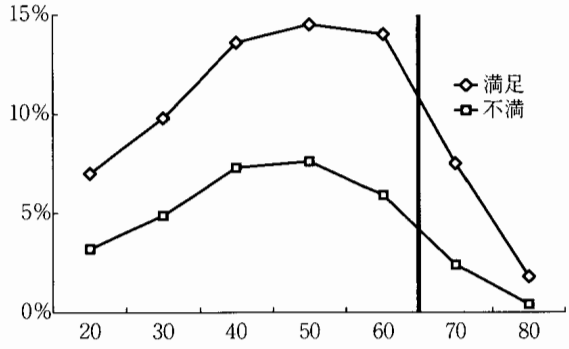
ば普通の選挙人と変わらず不満・満足を政治に現すが，80歳になって一挙に満足化するというのか，謎である。

8.4　全体ー生活満足化が政治満足化より多数派

図表 8.4a　生活満足ー第Ⅰ期全体％

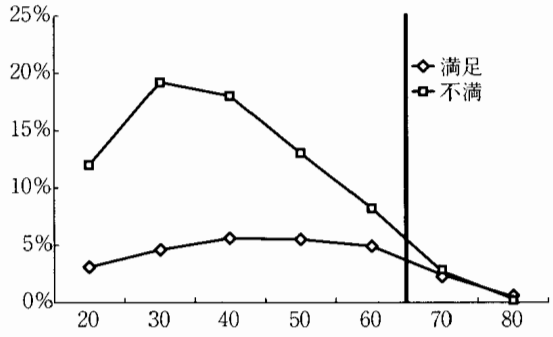


図表 8.4b　生活満足ー第Ⅱ期全体％

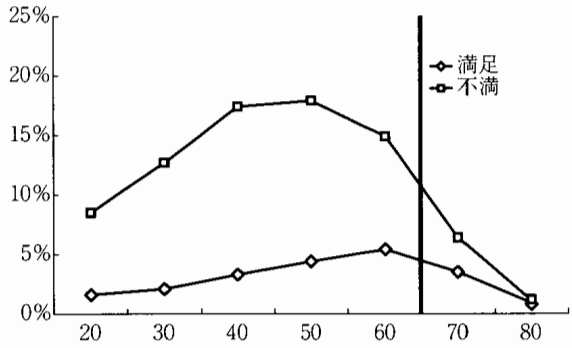


全体の％で見てみると，第Ⅰ期では満足・不満足とも中年以下に分布しており，第Ⅰ期では中年に分布が偏り満足者がかなり多い。

図表 8.4c　政治満足ー第Ⅰ期全体％



図表 8.4d　政治満足ー第Ⅱ期全体％



政治満足は，全体として満足層は変わらないが，不満層は若い時期の政治不満を持ってきている。

生活満足・政治満足ともに，人口の分布に伴っているといえるが，若干高齢者について付言をすると，満足化傾向は明らかに生活満足化のほうが政治満足化より多数派となってゆき，図表 8.4c，d に見るように，政治満足化は晩年でないと訪れない。逆に言うと，政治における不満，不足，欠乏等は不断のそれを充足させるためのダイナミズムを起こさせる源泉となり，新老人期において一層顕著になるといえる。

8.5　投票と政治不満，高齢者の生活に満足する傾向

投票との関係において，政治不満は，政治不信と関係があると考えられ

独立変数として無党派的意味で参加と関係づけられるか，あるいは参加する場合野党投票か泡沫候補者投票と関係づけられてきた。

図表 8.5　投票と不満

	生活満足と投票	生活満足と投票政党	政治満足と投票	政治満足と投票政党
第Ⅰ期（全体）	.04(**)	.14(**)	.026(**)	.33(**)
第Ⅱ期（全体）	.07(**)	.13(**)	.076(**)	.26(**)
第Ⅰ期（65 歳以上）	.10(**)	.20(**)	.01	.34(**)
第Ⅱ期（65 歳以上）	.10(**)	.14(**)	.04(*)	.27(**)

図表 8.5 のデータはデータ中の生活・政治満足と投票・投票政党との相関係数である。

投票と生活満足・政治満足との関係はデータ別プール別に見ても殆どない。投票政党との関係はいずれもあるが，生活満足は政治満足の半分くらいの値である。日本の選挙人は不満があっても一般に年齢の違いを問わず投票をする傾向が現れている。「全体」と「65 歳以上」を比べても余り関係がない。日本の選挙人は不満がある場合年齢の違いを問わず野党投票をする傾向が現れている。しかし，第Ⅰ期と第Ⅱ期の違いが.1 に近いくらい違いがある。この点については次節で述べよう。

さて，老年学では，高齢者の生活に満足する傾向[28]が指摘される。

香取は日米の 2 組のサンプルに対して活動理論と離脱理論を応用して前者の一見活発なメディア接触行動より後者の「死を受け入れる」態度のほうが納得出来るという。「美しく咲かせた花も，たわわに実らせた果実もやがては枯れる。朽ちて土に戻り，肥やしとなって，新たな生命の誕生に寄与するのである。このような生命の循環を感じ取れるような生活をしていれば，自らの生もまた，自然界の生命現象の一環だと位置づけることができる。死ぬことによって，生命が終わるのではなく，やがて誕生する新しい生命に継承されていくことが実感されるからである。生命のもつ自然のサイクルに自らの生を位置づけ，彼岸の境地に達している浜田さんは，心穏やかに老いを迎えることができていた[29]。」活動理論に基づく 2 人は，「近代的な自我を持ち，さまざまなグループに」所属して活発にしていよ

うともいずれ「高齢化にともなうネガティブな刺激をありのままに受け取るだけの心の余裕がなかった」[30]のであり，これは「産業化社会」が「老いを排除する」努力と一致するという[31]。他方，離脱理論に基づき生活満足感の高い２人は，「老いを認め」メディア等も「老いを排除しない文化」に接触していたという[32]。

この考えの問題点を見ると以下の通りである。

第一に，離脱理論のほうは，超高齢者に適用するべきで，新老人には活動理論が当てはまる。

第二に，日米の文化理論の違いに目を向けるべきだろう。

第三に，活動理論のみではあきらめきれないで，かつ自分の一生で解決がつけられそうもない課題に取り組んだグループは更に過激になる。「貧窮者の大部分は老人である。閑暇は定年退職者に新しい可能性を開いてはくれない。彼がようやく強制から解放されたとき，人びとは彼がその自由を活用する手段をとりあげるのである。彼は孤独と倦怠のなかで無為に生きるべく運命づけられる，たんなる屑として。人間がその最後の一五年ないし二〇年のあいだ，もはや一個の廃品でしかないという事実は，われわれの文明の挫折をはっきり示している。現役で働いているときには，労働を強制されて人間らしさを失い，退職したら余暇を楽しむ手段を奪われる。いずれにしても人は疎外されている。こうボーヴオワールは説明するのである[33]。」ここで不満は疎外に発展する。

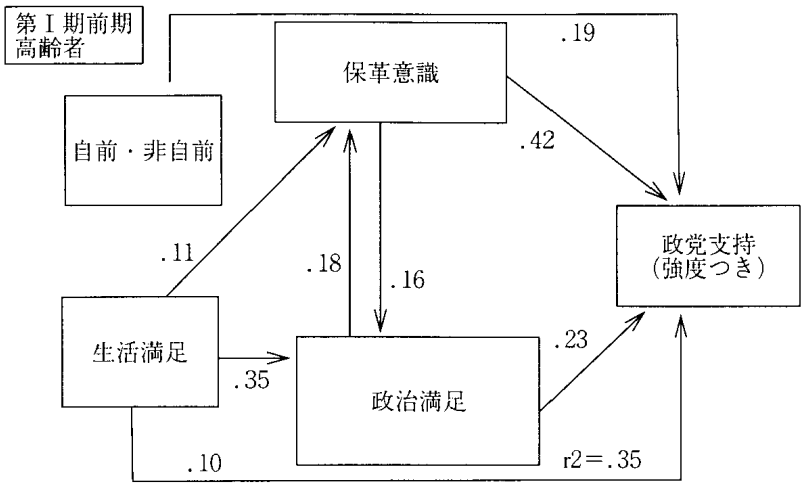
9．高齢者の党派選択のパス解析

9.1 デ ー タ

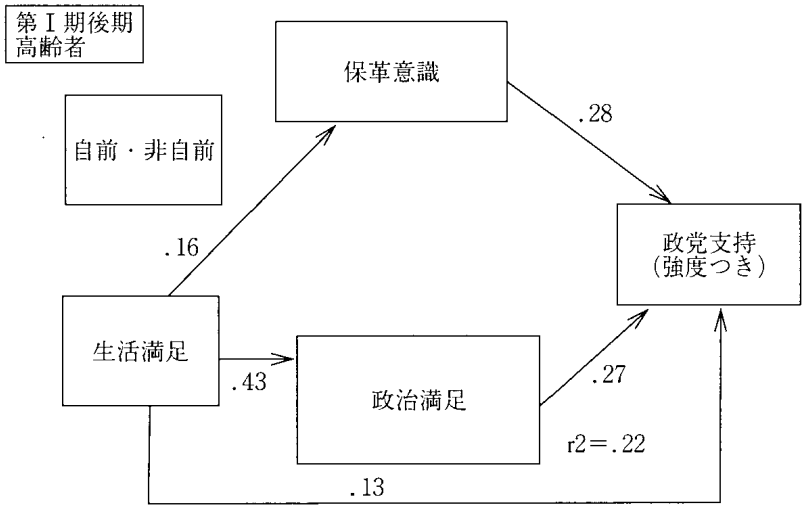
本論で対象とした諸変数をパス解析に投入してみる。

変数の方向のみ言及する。政党支持，保革意識，自前は，非自民－自民，革新－保守，非自前－自前である。政治満足，生活満足は，不満－満足である[34]。そして，超高齢型政治意識を後へ押しやる傾向その他などを総合的に説明するかどうかを試みてみる。各時期とも前期高齢者，後期高齢者の

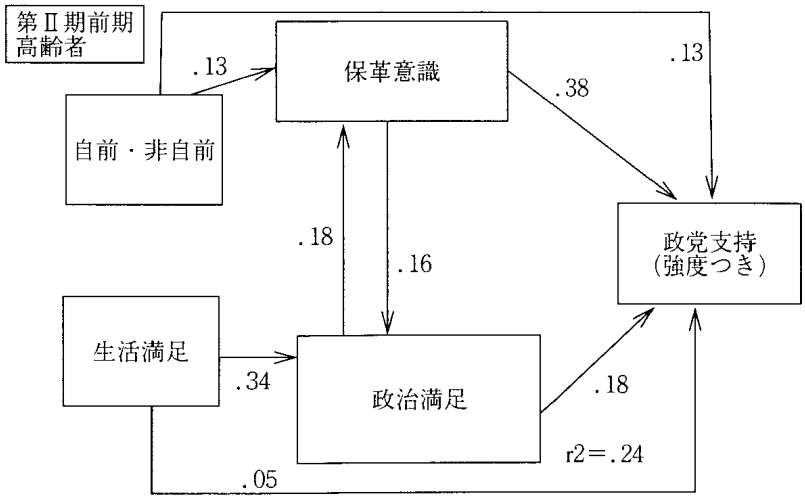
図表 9.1a



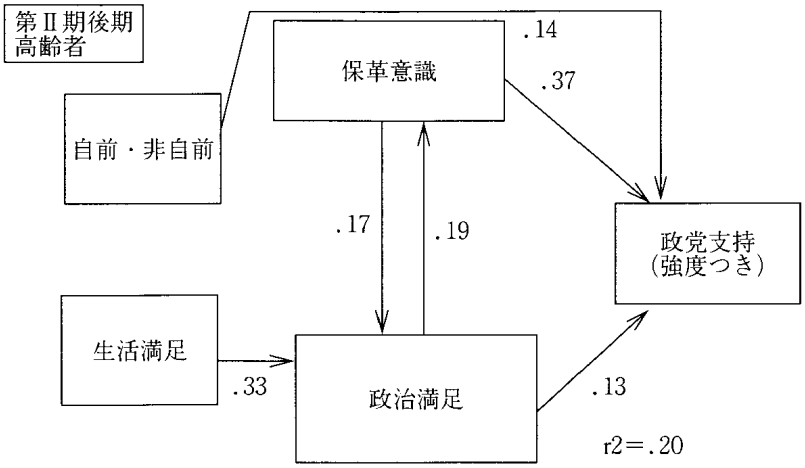
図表 9.1b



図表 9.1c



図表 9.1d



二グループに分けている。

9.2 結　　果

ここでは，第Ⅰ期，第Ⅱ期間の違いについて高齢者のみに焦点を当て，本論で触れた変数すべてを取り上げそれらの役割と変容を見てゆく。

第一に，後期高齢者にはいずれの時期においても，政党支持に影響を与える四つの要因のうち直接影響を与えるものが少なくなっている。もっとも大きな直接の規定力があるのは，保革意識であり，殆ど唯一のものといっていい。しかも，第Ⅰ期．28，第Ⅱ期．37と，その規定力を上げてきている。

第二に，生活不満，政治不満は超高齢型政治意識のうち，保守化と競合する役目を果たしていた。年度別に分析して見るためにテストもしてみた(35)。他の年齢層と比較すると，第Ⅰ期後期高齢者は，第Ⅱ期より，政治不満と政党支持とは関係が一層深い。

八七

図表 9.2　第Ⅰ・Ⅱ期後期高齢者

	76	83	86	89	90	92	93	95	96	00	01
政治満足度	*	*	0.4	*	0.26	0.22	*	*	0.25	*	*
保革意識-実	0.7	0.62	*	0.42	0.39	0.43	0.58	*	0.27	0.35	0.33
自前意識	*	*	0.3	*	0.30	0.21	*	*	*	*	*
生活満足度	*	*	*	0.25	*	*	0.25	*	*	*	*

図表 9.2 によると，政治不満はそもそも第Ⅰ期後期高齢者をやや保守化に優位して現出させる原因となったのではないだろうか（それが非政治化に見えたのかもしれない。）。しかし，第Ⅱ期になると政治満足の政党支持への影響力が弱まる一方で，保革意識の規定力は高まったのである。つまり，政治不満は依然として高いものの，政党という外的対象を失いつつあり，政治からの撤退を促進するものとなっている。最近の投票率の衰退は目を見張るものがある。

第三に，職業は第Ⅰ期後期高齢者を除いて全て直接・間接に関係がある。まだ晩年型同居が一般的な第Ⅰ期時点では，職業との関係が消滅するのは当然のことである。新しい傾向として，第Ⅱ期後期高齢者も膨大な数になり，子等との同居も減り，また管理職等の新しい職業層の登場により職業としての世論が明確になったことによるのだろう。しかし，高松調査のように，過去の職業としては影響がないという結果もあるし，ここでは追試が必要だろう。

最後に，後期高齢者の場合と比べて値の変化は少ないが，前期高齢者の時期間比較をやっておきたい。

政治満足と生活満足からの影響は，.23→.18 と .10→.05 と低くなる一方であり，それでも保革意識が高い値を保っていることは，保守化という第Ⅱ期のデータを特徴付けている点である。

それでも第Ⅰ期前期高齢者はかなりな程度ストレートに保守化の途上にあったのだが，第Ⅱ期高齢者は若干それが遅くなったことはすでに見たとおりである。それは，.41→.38 という保革意識からの影響力の強さの変容で見うるかもしれない。

10. ま と め

証明すべき仮説として，「1．はじめに」にあげたもののうち，次のことが分かった。

(1) シーリング効果が存在する。自民投票で70%強，自民支持で60%，保守65%，生活満足80%，政治満足60%，で現在のところ止まっている。

(2) 高年期も含めて，成人として活動する期間＝成人政治活動期間が実に長くなった。

(3) 超高齢型政治意識が存在する。それは，保守化＝自民化，非政治化(＝生活満足化）であろう。投票者の中で高齢者の自民化ははなはだしいものがあったが，第Ⅱ期前期高齢期では自民化を押しとどめる動きがあったことは特記しておいてよい。

次に，不活発なものも含めた支持の傾向の中では，第Ⅰ期の後期高齢者の中に自民化を押しとどめるものがあった。政治不満がいい形で働いたのか（改革の方向へ），撤退のほうへ向かせるように働いたのかは現在のところ推測以上のことは分からない。現在は，超高齢期政治意識は自民化だけである。

(4) 高齢期に進入値・交点は次のようであった。投票政党は自民進入値第Ⅰ期63%，交点40歳，第Ⅱ期56%，55歳，政党支持で自民支持第Ⅰ期55%，30歳，第Ⅱ期49%，40歳，イデオロギーで保守第Ⅰ期55%，「中間」との交点30歳，第Ⅱ期55%，45歳，生活満足で満足が第Ⅰ期75%，交点なし，第Ⅱ期72%，交点なし，政治満足で不満が第Ⅰ期59%，74歳，第Ⅱ期68%，83歳，である。イデオロギーの経年的保守化を別にすれば，現実の政党選択に関係ある投票政党と政党支持でなお活動できる場所があった。そして，お互いの変数同士の関係の有り方はともかく，ノーマルなライフサイクルの存在のみがあるとすれば，明らかに，65歳までの期間が10年か15年伸びているのである。これこそ新老人が活躍できる場を大きく与えたとはいえないだろうか。

(5) 世代の影響が存在しており，実は，この影響を除くことが加齢と同時に決着をつけねばならない歴史的な課題であった。成功している。

(6) 職業の影響は，かなり長い間その人に影響を与えるようにかわった。[36] ただ，職業については高齢者用のをとっていないので更なる追試が必要である。職業上の問題点はあるとしても，この研究の変数をパス解析にかけてみた結果，政党支持は，保革意識が最大の規定力を持つ，政治不満からの影響力は低下気味である，職業は関係が深い，前期高齢者の間で若干の値に低下をみ，それが多少保守化の影響力の低下を見せた。

政治老年学の課題は，超高齢期政治意識を発見しそれを人生の末期にまで追いやれていることを確認すること，あるいは高齢期に入ったらすぐに「老人」になったと思っている人を再々社会化[37]し再び政治の世界へ呼び戻すことであった。また，老年学一般においても高齢者のリハビリが重視されたり，プロダクティビティが重視されたりすることが課題とされることと軌を一にしている。まさに，サクセスフル・エイジング[38]の時代である。

(1) 本論文の執筆中さまざまな助言をいただいた三宅一郎神戸大学名誉教授と，堤英敬香川大学助教授に感謝したい。なお，出来上がりは，すべて神江の責任であることは言うまでもない。アイデアの出発点は，三宅『政党支持の分析』(1985) に頂いている。

(2) 神江伸介「少子高齢社会における高齢者の参加行動：明推協のプールデータより」(『香川法学』香川大学法学会，23 (1/2) 2003年，9月20日)，「政治老年学の方向性」(『現代のエスプリ』至文堂430，2003年5月)。

(3) E.H.エリクソン，J.M.エリクソン著，村瀬孝雄，近藤邦夫訳『ライフサイクル，その完結』(2001年3月) の第九の段階に近い。彼／彼女は，Ⅶ 成人期，Ⅷ 老年期の二つを描いていた。新たに第九の段階（最終段階）を設定すべきであると言う。「八〇歳代後半から九〇歳代の超高齢者の目をとおしてみると，その人たちの体は，どのように大切にいたわっていても弱り始め，かつてのような働きを見せなくなる。第八の段階（老年期）で出没し始めた絶望は，第九の段階では，切っても切れない道連れとなる。身体能力の喪失をもたらすような緊急事態がいつやってくるか分からないという不安を打ち消せない。」(同書，151－152)。そして晩年が訪れる。老年

学関係の文学書などでもさまざまな死が扱われる。思いつくものだけでもあげてみると，僧侶の場合，「夜，鎌田院長が奥さんと見舞いに来てくださった。院長はもうなにもなさらず，ただベッドの横に座り，手を握っているだけだった。和尚は手を握られたまま，「どうもありがとうございました。もうどこも痛くありません」とはっきりと院長にお礼を述べ，別れ際にはいつまでも手を合わせ鎌田院長を見つめていた。その顔は，いままで一度も見たことがないほど，やさしく穏やかで美しく，その光景にみな涙が止まらなかった。いのちが燃え尽きる寸前に，仏さまが与えてくださった貴重な感動のひとときであったのかもしれない。」（高橋卓志著『死にぎわのわがまま』，1996年，209頁）。佐江衆一の母の死では，「母はそんな芝居を演じて，絶食しているのではないのか。食絶ちをして，自分から死のうとしているのではないのか。いや，そんなことができるだろうか。……母はこれ以上私や妻に迷惑はかけまいと，死のうとしているのか。父の首を絞めようとする自分が息子に毎晩手を縛られていたことに気づき，そんな情ない自分に愛想をつかしたのだろうか。それとも，私が死んでほしいと願っているのを感じとって，その悲しみと私のために死を選んだのか。それも自分から食絶ちして，樹木の黄葉紅葉が秋の終りとともに落葉するように，ごく自然にゆるやかに死を迎える自死の方法。」（佐江衆一著『黄落』1995年，168－9頁）。もう宗教だけだろうか，それとも，例えばここで言う「満足感」（最終的には生活満足と政治満足が合致する）が，解明の手がかりを与えてくれるのか。私はここで非高齢者からみた政治意識で結論を見上げるより，晩年期から遡ってみるとどうなるかという方法論上の転換を言っているのだ。

(4) 以下，明推協と呼ぶ。尚，2003年度夏高松市で高齢者調査を実施した。本論では，そのデータも一部利用している。

(5) 日野原重明著『「新老人」を生きる』(2001年)，で提案されていたこと。

(6) 注2参照。

(7) 前回では，〈前〉と〈後〉とネーミングしていたものである。前期高齢期と後期高齢期と混乱しやすいので第Ⅰ期，第Ⅱ期とした。

(8) 実際は15%程度なので，なぜ低いか今後の検討課題である。

(9) 第Ⅰ期中の高齢者サンプルの少なさを補うという目的が最初のプリミティブな動機であった。

(10) 職業の影響については，私が行った高松調査のほか，異常なほどの日本人の勤労意欲も含め，さまざまな追試が必要だろう。川上昌子著『都市高齢者の実態　社会福祉学としての考察』(2003年，29頁)，嵯峨座晴夫著『高齢者のライフスタイル』(1999年，59～頁)，田尾雅夫他編『超高齢社会と向き合う』(2003年，99～頁)，ロバート・バトラー他編　岡本祐三訳『プロダクティブ・エイジング　高齢者は未来を切り開く』(1998年）参照。

(11) 高松調査では職業の影響は確認されなかった。

(12) 堤英敬助教授のアドバイスによる。

(13) ばらすとき，1977，1979，2000の原データが10歳刻み等であることに注意。

(14) データを分解すると，第Ⅰ期中プールデータで見えた後期高齢期での自民投票の弱まりは，83年以降95年まで続く時勢の影響にあるようだ。しかし，現在のところわからない。

(15) リコールデータに基づいて詳細な分析がやれるほどのものではない。明推協データではせいぜいプールデータの数を誇れるのみである。

(16) 三宅『政党支持の分析』(1985，311頁）では，更に細分化されている。三宅のように，リコールデータのあるもので，「政党支持をはじめて持った時期と年齢」のような正確な対応はできない。ここでは，せいぜい女性の初めて選挙人になっての影響と社会化との関係を，加齢と同時に与えている，ぐらいがわかるのみである。三宅のような分析は，ここではできないが，上のような意味で参考程度にという消極的意味と，ライフサイクル的な影響が検出できるという積極的意味でつけた。むしろ，ここでは「ii　性別・年齢階層別支持強度」に近い。同書，303頁。

(17) 長嶋紀一他編著『老人心理学』82－3，86－7頁。

(18) 下仲順子編『老年心理学』70頁，1997年。

(19) 保革意識が，76年が，革新－保守の2値であるのに対して，01年が4分割であるから正確な比較はできない。ここで述べたことは，仮説にとどまる。

(20) 「第一に，性別，年齢，学歴，所得などのデモグラフィックな要因の中で，職業カテゴリーは政党支持（保守一革新）を弁別する最も有効な要因であったし（三宅，1972，1979)，今日でもそうである（2節)。」三宅前掲書，160頁。

(21) 三宅前掲書，185頁。

(22) 面接調査の間中，学生がそばについていて不明点の質問を受けるというもので，半分面接調査と呼称する。

(23) こちらは面接調査であるが，高齢者4人ぐらいに1人の職員がついていて調査をするというものである。

(24) 例えば，染谷俶子編『老いと家族　変貌する高齢者と家族』(2000年，9頁）参照。

(25) 明推協も，都市規模別に分析すると，第Ⅱ期大都市以上になると，高松市と同じ結果がでて来る。

(26) 古谷野他編著『新社会老年学』(2003年，109－122頁）で，「(a)役割に依拠しない安定したコンボイのメンバー，(b)いくらか役割に依拠し，長期的には変化しやすいコンボイのメンバー，(c)役割の変化に影響されるコンボイのメンバー」で構成するコンボイで，高齢者になると(a)に近づく，とされる。

(27) 三宅一郎『投票行動』(1989，125)。

(28) 主観的幸福感といわれるが，これは健康状態，社会経済的地位，社会的活動と関係が深いとされている。例えば，「最も影響が大きいとされているのは，高齢者自身

の「健康状態」で，健康状態が良好な高齢者は主観的幸福感も高い。」「65歳以上の高齢者では7割前後の人が健康であるとみてよい。」「85歳以上の高齢者層で50～60%の人が健康な生活を送っていることがわかる。」嵯峨座晴夫『高齢者のライフスタイル』（1999年，122頁）。「「経済状態」であり，経済状態が良好な高齢者ほど主観的幸福感が高いという知見である，経済状態が良好な高齢者ほど主観的幸福感が高いという知見を得ている研究が数多くみられる。」「主観的幸福感に関する研究は，もともと「活動理論」と「離脱理論」の実証をめざした研究として発達してきたことから，…」社会活動変数と関係が深く，「労働時間，家事時間，趣味活動に費やす時間，団体や組織に参加する時間といった活動時間数，家族・親類の人数，知人・友人数，それらの人との訪問・面会回数，電話回数といったネットワーク的変数，役員・リーダー等の地位といった役割的変数など」と関係が深いとされる。下仲『老年心理学』p. 145。その他，古谷野他編著『新社会老年学』2003年，149頁を参照。

(29) 香取淳子著『老いとメディア』（2000年，200頁）。

(30) 同書，196頁。

(31) 同書，205頁。

(32) 日本では時代劇，アメリカではカントリー&ウエスタンを好んで見聞きしていたという。同書，203頁。

(33) 安川悦子他編著『「高齢者神話」の打破　現代エイジング研究の射程』（2002年，56頁）。

(34) それぞれ，政党支持強度が入ったりして4～5段階の間隔尺度である。

(35) 殆ど結果は変わらないので図表は省略。

(36) 高松調査では職業の影響は確認されなかった。

(37) 再々社会化については，生涯・社会教育分野につき進んでいる。野上芳彦著『超高齢社会をいき活き生きる…』（2002年，47－48頁），関口礼子編『高齢化社会への意識改革』（1996，182－183頁），堺屋太一著『高齢化大好機』（2003，100頁），安立清史編『ニューエイジング』（2001年，67頁）辻正二他編著『エイジングの社会心理学』（2003年，94頁）参照。

(38) 「サクセスフル・エイジングという用語は，老年期に入って，様々な老化に対してうまく適応し，快適な人生を全うするために望ましい人格特性や行動様式を探究するもので，老年学分野では以上の良適応状態をサクセスフル・エイジング」（successful aging）と定義される（下仲前掲書，p. 77）。その他，東京都老人総合研究所編『サクセスフル・エイジング　老化を理解するために』（1998年）参照。